

H27 年度西東京市立保谷第二小学校飼育引継集会参加報告

西東京市立保谷第二小学校担当獣医師 中川清志, 中川美穂子

西東京市立保谷第二小学校では、四年生が総合の時間の中で、年間授業計画に則り、動物飼育活動に取り組んでいる。その締めくくりとして、四年生児童（以下、上級生）による三年生児童（以下、下級生）への引継集会（以下、本集会）が実施されている。

本年度も、本集会は四年生担当教諭が計画実施し、学校担当獣医師は2名がゲストとして参加した。

司会進行は上級生が担当した。

「飼育活動探検タイム」ではウサギ・チャボの特徴や飼育方法をまとめた「研究コーナー」や「野菜切りコーナー¹⁾」など、そして実際にウサギ・チャボとのふれあいを実施する「ふれあいコーナー」などが企画されていた。下級生7~8人のグループに対し、上級生2名が随行し、各コーナーを案内することで、上級生が下級生に直接「命のバトン」を渡し、「思いを伝える」ことが出来るように工夫されていた。各コーナーを担当する上級生もまた、例えば包丁の使い方や日誌記入方法、およびウサギ・チャボを怖がらせないようにするためにはどうすれば良いのか、といった、具体的なコツを丁寧に伝えていた。また、「ふれあいコーナー」に出動したウサギやチャボは、精神的にも身体的にも疲労を覚えないように気遣い、20分で交代していた。

下級生は、上級生から直接、掃除およびゴミの捨ての方法などを含めたお世話の仕方を教わり、上級生が「動物たちを大切に思う気持ち」を感じることで、次の一年間その「バトン」を引き継ぎ、さらに未来へと引き継いでいくという事実を、徐々に認識していくと思われた。

現在の上級生が飼育をはじめた時にも、一学期に学校担当獣医師が訪問し飼育導入の触れ合い教室を支援している。はじめは動物に触れることで、ただ興奮したり、怖がったりすることが多い児童であった。しかし、その後「教諭が適切に介入する」「授業に組み込まれた」「愛着を持った飼育」を体験することで、学校のウサギ・チャボは、「自分たちが世話をする」「気持ちの通じる仲間」であるという気持ちが花開いていることを感じた。

本集会を通じ、授業に組み込まれた学校飼育動物活動は、実際の飼育を通じ多くの経験を得、自らで考え整理し、さらに下級生に伝えていくという、能動的な学習であることも再認識された。本小学校で実践されている授業の流れ及び学年飼育が作文の表現に与える影響について、図1および図2を参照されたい。

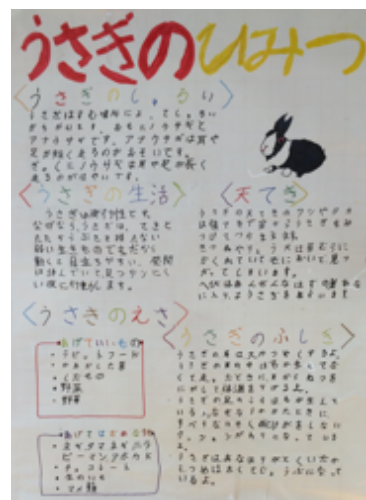
1) 実際の飼育現場では、食事の下準備となる野菜切りを、ウサギなど飼育動物に対するアレルギー症状を呈する児童が担当するなどの役割分担を行っている。



動物の気持ちを気遣いながら抱っこ



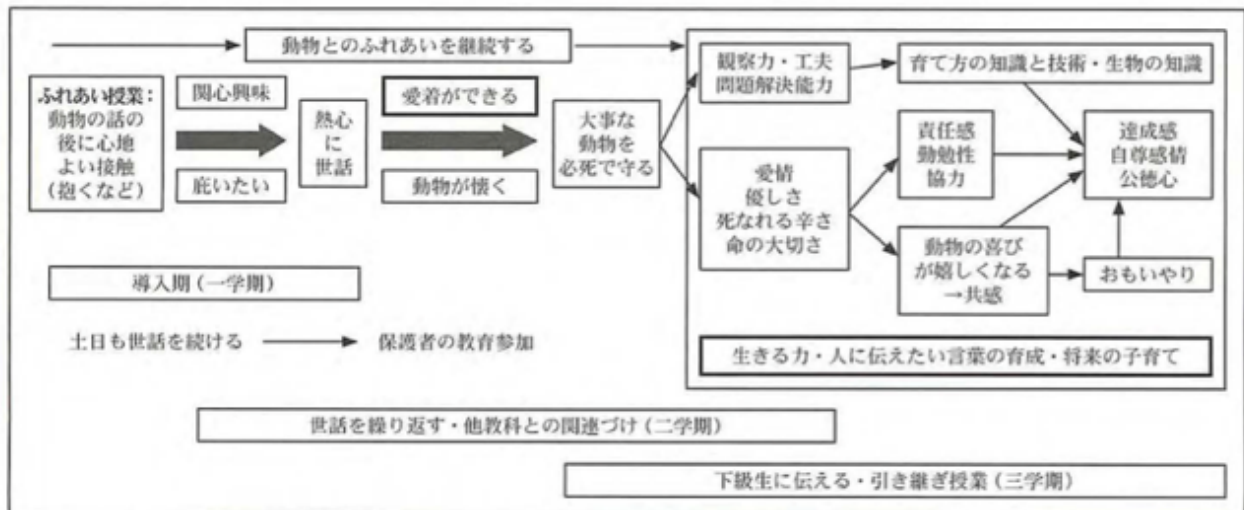
上級生がウサギの世話について説明



上級生作成「うさぎのひみつ」

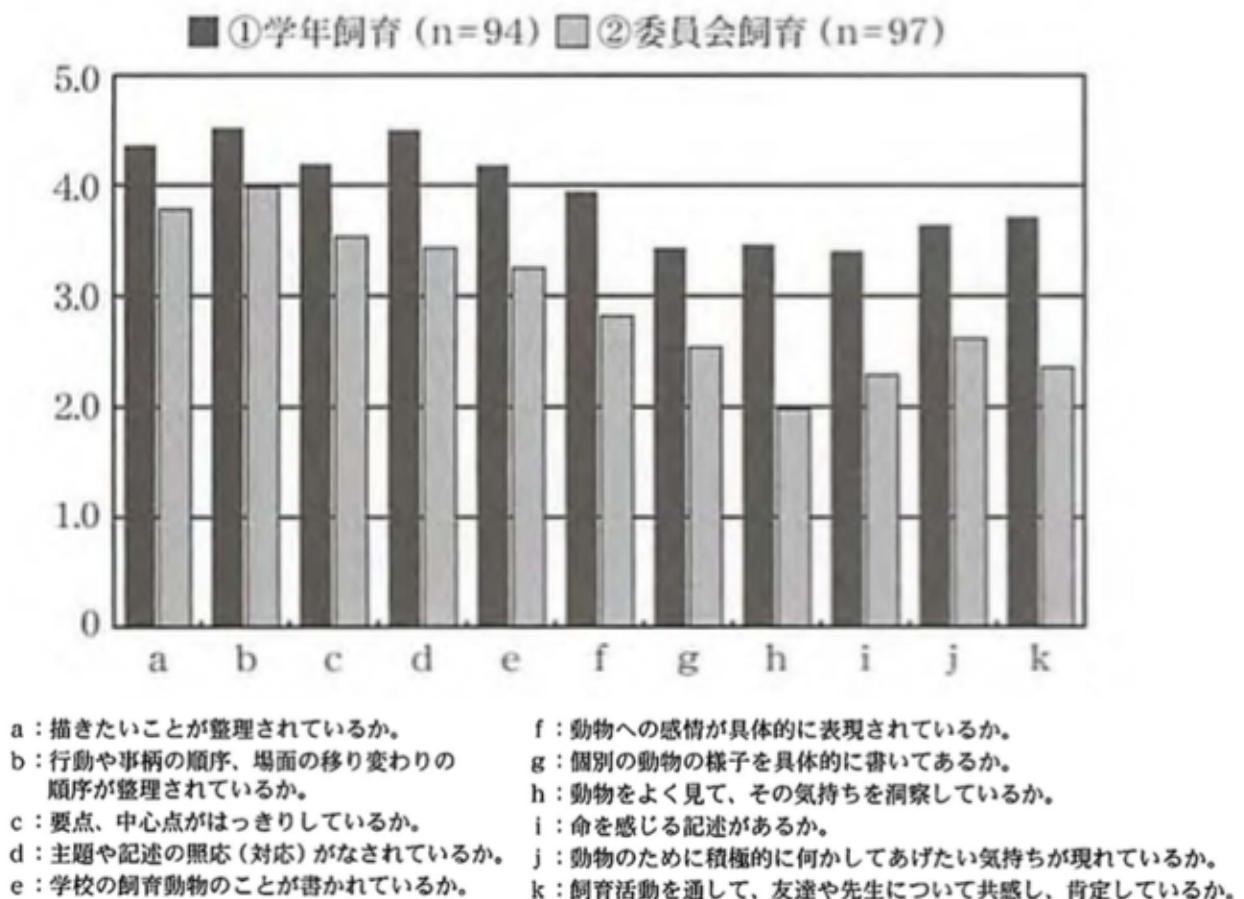


野菜切りはアレルギー症状を呈する子どもが担当することが多い



1学期の飼育導入のふれあい授業後の日常の世話と動物とのふれあいの継続が、児童に動物への「愛着」を培う。その後の2～3学期を通じ、児童には様々な飼育活動の影響が顕れる。これは将来の子育てまでつながる可能性がある。

図1. 飼育活動が児童に与える影響の流れ 中川美穂子, 無藤 隆., 2015



- a : 描きたいことが整理されているか。
- b : 行動や事柄の順序、場面の移り変わりの順序が整理されているか。
- c : 要点、中心点がはっきりしているか。
- d : 主題や記述の照応 (対応) がなされているか。
- e : 学校の飼育動物のことが書かれているか。
- f : 動物への感情が具体的に表現されているか。
- g : 個別の動物の様子を具体的に書いてあるか。
- h : 動物をよく見て、その気持ちを洞察しているか。
- i : 命を感じる記述があるか。
- j : 動物のために積極的に何かしてあげたい気持ちが現れているか。
- k : 飼育活動を通して、友達や先生について共感し、肯定しているか。

図2. 学年飼育と委員会飼育をした場合の作文の比較 中川美穂子, 無藤 隆., 2015